

『パリのセーヌ河岸』

～オルセー美術館と印象派誕生 150 年～

今年 2024 年はオリンピックで賑わいを見せたパリ。

パリと言えば芸術の都。芸術の世界においても、今年は印象派が誕生して 150 年の記念すべき年です。



オルセー美術館（旧オルセー駅舎）

■ 世界遺産『パリのセーヌ河岸』

パリのセーヌ河岸は、パリ中心部のセーヌ川沿いに建つ歴史的建造物群と言った方が分かりやすいかもしれませんが、パリ市内観光で訪れる多くの見学先は、世界遺産に登録されています。エッフェル塔、シャイヨー宮、ノートル・ダム大聖堂などのお馴染みの観光名所に加え、アンヴァリッド、サント・シャペル、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった歴史的建造物群が揃っています。

紀元前3世紀にパリシイ人が住み着いたシテ島から、パリの歴史は始まりました。12世紀には、そのシテ島にノートル・ダム大聖堂の建設が始まり、16世紀にはルーヴル宮（後のルーヴル美術館）が王宮として利用されました。1889年には第4回パリ万博に合わせてエッフェル塔が完成し、1900年には第5回パリ万博に合わせてオルセー駅（現在のオルセー美術館）が開業しました。このように、セーヌ河岸には時代を経て歴史的建造物が次々と建設されました。パリはまさに歴史とともに歩む芸術の都です。

■ オルセー美術館と印象派の近年 50 年の変遷

オルセー美術館は、旧オルセー駅舎を改築したもので、1986年に開館しました。オルセー駅は1890年開業しましたが、長距離鉄道としての役目は第二次大戦中にほぼ終了し、その歴史はとても短いものでした。現在では、駅舎の地下部分がRER-C線のミュゼ・ドウ・オルセー駅になっています。

私が初めてパリを訪れたのは1979年のことでした。当時、オルセー美術館はまだ存在しておらず、日本からのパリへの直行便もなく、アジアや中東諸国を2～3箇所経由する南周りで20時間以上かかった時代です。

オルセー美術館が完成する前、現在のオルセー美術館に展示されている印象派の主な作品は、ジュ・ド・ポーム国立美術館（旧印象派美術館）に展示されていました。1979年当時、ジュ・ド・ポーム国立美術館は観光客がこぞって見学するような美術館ではなく、ひっそりとした佇まいを見せていました。現在ではルーヴル美術館とオルセー美術館はパリの2大美術館とされていますが、当時はパリを訪れる観光客の主な目的は“ルーヴル美術館のみ”で、ジュ・ド・ポーム国立美術館が注目されることはありませんでした。このように、印象派の作品はオルセー美術館誕生以前には、今ほどの脚光を浴びてはいませんでした。印象派が本格的に注目されるようになったのはいつからかという、それは1986年にオルセー美術館が開館してからです。開館と同時に、世界が印象派に注目し始めました。開館に向けて、パリ市内の美術館に収蔵されていた作品は、時代ごとに分けられました。主に18世紀の作品はルーヴル美術館へ、19世紀の作品はオルセー美術館へ、20世紀の作品は国立近代美術館（ポンピドゥー・センター内）へと移され、それぞれの時代区分に応じて収蔵されました。アングルの『泉』やミレーの『落穂拾い』をはじめ、ルーヴル美術館からオルセー美術館に移された作品も多数ありました。印象派の作品はオルセー美術館に集約されることで、印象派の作品がオルセー美術館の主演となり、印象派の作品がいつもの注目を集めるようになったのです。

日本では1980年代になると、印象派の画家たちの企画展が多く開催され、印象派が徐々に注目を浴びようになりました。当時学生だった私は、印象派の画家の企画展が開催されるたびに美術館に足を運んだものです。なぜ1980年代だったかという、そのヒントは画集にあります。日本の写真撮影技術の向上も、印象派人気の後押しをしています。1970年代の画集には白黒のものもあり、またカラーでも色彩が伝わりにくいものもありました。1970年代は、バルビゾン派の作品の方が、印象派の作品よりも人気があったように思います。特に印象派の作品は、その色彩が重要です。本当の色彩に近い画集が世に出ることによって、日本でもその人気に拍車がかかりました。また、日本には印象派の収蔵作品が多く、30以上の美術館で観ることができます。それに対して、アジアの諸外国では殆ど収蔵作品がありません。日本は印象派作品と触れ合うにはたいへん恵まれた環境にあるのです。

今年2024年は、印象派誕生150年の節目の年です。私にとってのこの約50年は、印象派の作品が常に身近に感じられる時でした。印象派の作品と触れ合い続けてきたことで、肌感覚で分かります。印象派の色彩表現、色の使い方、筆致など印象派の画家たちから多くを学ぶことができます。

■ 印象派とは……



ベルト・モリゾ『トロカデロからのパリの眺望』
1872年頃／サンタ・バーバラ美術館所蔵



エドゥアール・マネ
『すみれのフーケのベルト・モリゾ』
1872年 / オルセー美術館所蔵



エドガー・ドガ
『バレエのレッスン』
1874年 / オルセー美術館所蔵

「印象派」とひと言で言いますが、印象派の定義について考えたことはありますか。見解は様々ですが、私は、1874年から1896年まで8回続いた「印象派展」に参加した画家たちに敬意を表して、本当の印象派は、“印象派展に参加した画家たち”のことだと解釈しています。たとえば、エドゥアール・マネは、日頃から印象派の画家たちと行動を共にしていたにもかかわらず、「印象派展」には1回も参加していません。これが、マネが印象派に属していない理由のひとつです。もし参加していたなら、印象派の系譜や有り様も少し違った形になっていたでしょう。一方で、ドガはその画風が他の印象派の画家たちとはまったく異なりますが、「印象派展」には7回も参加しており、印象派を代表する画家となっています。「印象派展」に参加していない画家の中でも、印象派に作風が近い画家もいますが、印象派のカテゴリーに含むかどうかは見解が分かれるところです。また、アメリカやイタリアの「印象派」……フランス以外で「印象派」という名称を見かけることもありますが、実際には「印象派の影響を受けた画家たち」という表現が適切でしょう。

■ 印象派らしい作品とは……



ピエール＝オーギュスト・ルノワール
『ピアノを弾く少女たち』
1892年 / オルセー美術館所蔵



クロード・モネ
『睡蓮の池、緑のハーモニー』
1899年 / オルセー美術館所蔵



カミーユ・ピサロ
『オペラ座通り』 / 1898年
オルセー美術館所蔵

印象派の作品というと、どのような作品をイメージされますか。モネの『睡蓮』の連作（1890年以降）、ルノワールの『ピアノを弾く少女たち（1892年頃）』、ピサロの『オペラ座通り（1898年頃）』など、様々な名画が思い浮かぶでしょう。これらは印象派を代表する3作品ですが、作風はそれぞれ異なります。いずれ

の作品も、50代以降に描かれた円熟期の作品です。画家の作品は年代別に見ることをお勧めします。ひとくちにモネの絵と言っても、年代によってかなり異なります。先に述べたように、モネをイメージづけた『睡蓮』の連作は、50代以降の作品です。円熟期以前の作品には、油彩画の基本、特に色彩の基本、印象派の原型といえる作品を多く描かれています。ピサロやルノワールも同様に、年代別に作風が変化していきます。3人の画家の円熟期以前の作品は、共通して落ち着いた色調で描かれています。「印象派の画家たちの20～30代の頃の作風が、印象派の基本形」と、私は考えています。他にも、シスレー、バジール、女性画家のベルト・モリゾなど優れた画家はいますが、若かりし頃の作品は見分けがつきにくいことがあります。その見分けの難しさが、逆に「印象派の作品の共通点」や「印象派の原型」と言えるでしょう。ご参考までに、1870年代前半、「第1回印象派展」が開催された時期に描かれた作品。これが本当の印象派らしい作品です。モネの『睡蓮』の連作は、純粋な印象派というより、その発展形と考えるべきでしょう。ピサロやルノワールにも同じことが当てはまります。よく印象派の作品を「色を混ぜずに絵の具を隣り合わせに置いて、視覚で混ぜたように見せる」と評する意見もありますが、これは新しい描き方を模索したに過ぎません。また、印象派作品に共通するものでもありません。もっと原点に立ち返った作風が、本当の印象派作品なのです。



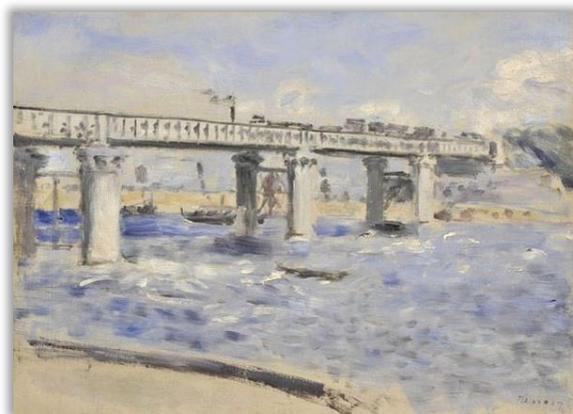
アルフレッド・シスレー
『アルジャントゥイユのセーヌ川』
1872年／オルセー美術館所蔵



フレデリック・バジール
『バジールのアトリエ』
1870年／オルセー美術館所蔵



カミーユ・ピサロ『ルーヴジェンヌの道』
1872年／オルセー美術館所蔵



ピエール＝オーギュスト・ルノワール
『アルジャントゥイユの橋』
1873年頃／上原美術館所蔵

次に、同じ印象派の画家であっても、作風がまったく異なることがあります。作風が相容れないと言った方が適切かもしれません。ルノワールとドガを例に説明しますと、ルノワールは絵付け職人であったため、その影響が作風に見られます。彼は「きれいな色で塗る」ことに重点を置き、デッサンをあまり重要視しませんでした。円熟期以降の作品は、きれいで穏やかな色調で描かれており、黒色を使っている形跡がありません。対してドガは、デッサン力を最重要視する画家です。アングルなどの古典主義の作風を自身の作風の系譜とし、とりわけ印象派の中ではデッサン力で抜きん出た存在でした。色彩についても、印象派の多くの画家が排除しようとした、黒色を多用しています。このように、同じ印象派の画家であっても作風が全く異なる場合があるのです。ドガが印象派の画家たちと同世代であり、新しい時代に合った作風や明るい色調を取り入れたことなどが、彼が印象派と協調路線を取った所以だと考えられます。



エドガー・ドガ『オフィスでの肖像』
1873年 / オルセー美術館所蔵



ギュスターヴ・カイユボット『床削り』
1875年 / オルセー美術館所蔵

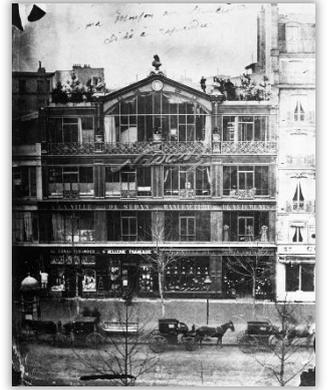
■ 印象派誕生の背景

印象派の作品の特徴として、一般的には光を追求、明るい色彩、大胆な筆致などが挙げられますが、この作風は時代の流れとも関係があります。それはなぜかという、チューブ入りの絵の具の登場により、戸外制作が可能となったからです。それまでは画家は自ら顔料で絵の具を作っており、持ち運びが難しかったため、部屋での制作が主でした。描く対象が自然の風景、都市の風景、街の人々の営みなどに変化し、また、鉄道の発達で、パリ近郊へ制作地を広げることもできました。さらに、写真の発明により肖像画の需要が減少し、描く題材の自由化が加速しました。カイユボットは、写真を元に風景を描いた作品が多いことでも知られています。戸外制作は、「時間と共に変化する光の影響」があるため、画家はそれに対応して描かなければなりません。光と影を意識し、新しい描き方を模索するようになったのは、自然なことです。印象派のみならず、パリの他の画家たちも、新しい題材を求め、チューブ入り絵具を利用して戸外で制作し始めました。社会の変化や発達が、印象派誕生に大きく影響しているのです。

■ 「第1回印象派展」と「官展サロン」

19世紀当時は、神話や歴史画などの伝統的な古典絵画が評価される時代で、唯一の展覧会であるフランス芸術アカデミー主催の「官展サロン」に入選するか落選するかが、画家の人生を大きく左右していました。新しい題材を求めて描いた作品を応募すると、当然、落選することが多かったのです。こうした新進気鋭の画家たちのために、1863年に「落選展（サロンから落選した画家の作品を展示）」が開かれました。新進気鋭の画家たちの本心は、「官展サロン」に認めてもらい入選することでしたが、なかなか願いが叶わず、悶々とした日々が何年も続きました。実際にマネやモネも新しい画風の作品で「官展サロン」に応募していましたが、一向に自分たちの作品を認めようとしないうつげん「官展サロン」への鬱憤が積もりに積もっていきました。そういった時代のうねりの中で、1874年に「第1回印象派展」が開催されるに至ったのです。

ちなみに、この「官展サロン」は主催者が変わり、「ル・サロン展」という名称で、現在も存続しています。20世紀初頭に「官展サロン」に対抗する形で設立された「サロン・ドートンヌ展（アンリ・マティス、ピエール・ボナールなどが参加）」は、ポスト印象派の画家たちで構成され、こちらも現存しています。西洋絵画の世界では、その権威は現在でも続いており、世界の双璧を担う国際公募展として、世界各国から応募者が集まります。今では、「サロン・ドートンヌ展」の方が「ル・サロン展」よりも権威が高く、その地位は逆転しています。



「第1回印象派展」が開催された
写真家ナダールのスタジオ
Atelier Nadar, 35 Boulevard
Des Capucines Paris, 1860



ベルト・モリゾ『ゆりかご』
1872年/オルセー美術館所蔵



ピエール＝オーギュスト・ルノワール『踊り子』
1874年/ナショナル・ギャラリー（米国）所蔵

私も絵画をたしなむ身なので、何度か応募したことがあります。入選すると分厚い入選作家の画集が送られてきます。入選作品は写実絵画から現代アートまで多岐にわたり、「サロン・ドートンヌ展」も「ル・サロン展」の垣根は、ほぼ無くなっています。現在の世界の絵画の潮流が分かるので、画集を見るのがとても楽しみです。入選作品の傾向は、抽象絵画や力感のある作品から、洗練された作品、穏やかな作品へと変わりつつあります。日本ではリアルさを追求する傾向がまだ主流ですが、おそらくその流れは徐々に変わってくるでしょう。

■ オルセー美術館の資産価値

印象派絵画にちなんだ物件で、世界遺産に登録されているのはどれくらいあると思いますか。間接的な物件はあるかもしれませんが、私が調べた限りでは、このオルセー美術館以外には1件もありませんでした。これは不思議なことですよ。個人的な願望も含めてですが、画家の聖地「モンマルトルの丘」や、印象派の制作の舞台となった「セーヌ川河口流域」、モネの描いた「ルーアン大聖堂」などは、とても興味深いです。いつの日か、世界遺産に登録されることを願っています。富士山のように、描かれることによって資産価値が高まることもあります。描かれることは、実はとても重要なことなのです。

オルセー美術館が世界遺産に登録された理由について、疑問に思うことがあります。もし旧オルセー駅舎の外観や建築様式だけが評価されたのであれば、はたして世界遺産になれたのでしょうか。展示作品が印象派を中心とした19世紀後半から20世紀初頭までの名画であることが、世界遺産登録の大きな要因だったと考えます。旧オルセー駅舎は、1900年の万博に合わせて建設され、その後約40年で鉄道は廃線となり、一部はホテルとして存続していました。そのような歴史的背景だけで世界遺産の登録物件になるのは、難しいかもしれません。しかし、オルセー美術館の価値は、外観や建築様式だけではなく、駅舎内部に展示されている印象派の作品にもあります。印象派の作品は、古典的な歴史画とは異なり、今現在を描いたものです。特にパリやその近郊を描いた作品が多く、150年前のパリの発展を現代に伝える重要な役割を担っています。発展目覚ましいパリの風景、鉄道の発達、パリの街を歩き交う人々、社交場で楽しむ人々など、150年前のパリをダイレクトに現代に届けてくれます。オルセー美術館は、印象派の画家や作品の歴史的背景があってこそ、世界遺産なのです。



沼田政弘

押さえておきたい 10 人の印象派の画家 (「印象派展」に参加した画家)

* 「印象派展」開催年：1874年、1876年、1877年、1879年、1880年、1881年、1882年、1886年（計8回）

画家（生誕年順に記載） ★「印象派展」の参加回数	ひと言コメント
カミーユ・ピサロ (1830年～1903年) ★8回	唯一、8回続いた「印象派展」にすべて参加した。 年齢的にもリーダー的存在。
エドガー・ドガ (1834年～1917年) ★7回	「印象派展」の後半を支えた画家。 “踊り子の作品”で有名、パステルを多用した。
ポール・セザンヌ (1839年～1906年) ★2回	ポスト印象派に分類されるが、「印象派展」に参加している。 世代も他の印象派の画家と近い。
アルフレッド・シスレー (1839年～1899年) ★4回	“最も印象派らしい画家”と称されるが、日の目を見る ことなく病死した不遇の画家。イギリス人である。
クロード・モネ (1840年～1926年) ★5回	印象派の第一人者。「印象派展」の前半を支えたが、 意外にも後半は積極的ではなく、「官展サロン」に応募した。
ベルト・モリゾ (1841年～1895年) ★7回	印象派を代表する女性画家。マネの影響を強く受ける。 マネの弟と結婚。娘のジュリー・マネも画家。
ピエール＝オーギュスト・ルノワール (1841年～1919年) ★4回	「印象派展」の中心人物のひとり。微笑ましい人物画で人気。 <small>うめはらりゅうざがろう</small> 梅原龍三郎など日本人画家にも大きな影響を与えた。
メアリー・カサット (1844年～1926年) ★4回	アメリカ人の女性画家。明るい色調で描いた “母子の作品”が多い。アメリカに印象派を ^{でんぱ} 伝播させた。
ポール・ゴーギャン (1848年～1903年) ★5回	ポスト印象派に分類されるが「印象派展」に参加している。 35歳まで株の仲買人だった。タヒチで傑作を遺す。
ギュスターヴ・カイユボット (1848年～1894年) ★5回	代表作『床削り』で知られる。裕福な家庭に育ち、 「印象派展」を経済的に支えた。ドガの影響が強い。

■ 印象派と関係が深い2人の画家

* エドゥアール・マネ (1832年～1883年) * 「印象派展」不参加

「カフェ・ゲルボア」に集まる印象派の画家たちをまとめ上げ、「バティニョール派」を形成した。
印象派の画家たちと親交が深かったものの、「印象派展」には1回も参加していない。
マネの大きな目標はあくまでも官展サロンへの入選であり、印象派には含まれない。

* フレデリック・バジール (1841年～1870年)

「第1回印象派展」が開催される4年前に普仏戦争で戦死。

マネやルノワールらと親交が深く、もし存命であれば「印象派展」の中心人物になっていたはず。